マサッチョ
Masaccio
短命の画家

清水茂俊

目次

１．はじめに

２．マサッチョ

３．聖母子

１．サン・ジョヴェナーレ三連祭壇画

２．聖アンナと聖母子（聖家族）

３．玉座の聖母子

４．カッシーニの聖母子

コラム１　キリストとブドウ

参考：国際ゴティック様式の聖母子

1. ジェンティール・ダ・ファブリアーノ
2. ゲラルド・スタルニーナ

補足：聖母子と洗礼者聖ヨハネと大天使聖ミケーレ

4. ブランカッチ礼拝堂

マサッチョの作品

１．楽園追放

２．貢の銭

３．新信者の洗礼

４．影で病人を癒す聖ピエトロ

５．布施とアナニアの死

６．テオフィルスの息子の蘇生と教座の聖ピエトロ

補足　自画像

コラム２　　楽園を追放されるアダムとエヴァ

補足　楽園で食べた「木の実」

コラム３　　女神の裸体像

５．聖三位一体

１．聖三位一体の技法

（１）　フレスコ画

（２）　一点透視画法

２．祠の外に描かれた奉納者

３．最下段に描かれた骸骨

コラム４　だまし絵

コラム５　ペストと死の舞踏

６．ローマでの作品

１．サンタマリア・マッジョーレ

２．聖クレメンテ聖堂

参考：マソリーノ

７．おわりに

８．参考文献

１．はじめに

15 世紀の初めに、ひとりの画家が彗星のごとくフィレンツェに現れました。
当時のフィレンツェには、ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノという、後に国際ゴティック様式と言われる技法で描く巨匠をはじめ、多くの画家は伝統に基づき、多くの決まりごとの中で作品を制作していました。
ゴティックの伝統の力は最後の輝きを放っていました。
綺羅星のごとく現れるルネサンスの巨匠たちはまだ生まれる前です。まだルネサンスは始まっていません。
なお、ジェンティーレ・ダ・ファブリアーノの代表作、『東方三博士の礼拝』はサンタ・トリニータ教会のために 1423 年に制作された作品でしたが、現在はフィレンツェのウィフィツ美術館で見られます。
ところが、この画家は従来の絵画・フレスコ画には見られない、全く新しい表現方法をとったのです。
画家は対象物を目に見えるままに描いたのです。決められた様式で描かれていたそれまでの表面的で装飾的な絵画の中にあって、正に画期的なことでした。
写実を基にしながらも、幾何学的遠近法で描かれた絵画は単に三次元的に外界の姿をそれらしく見せるだけでなく、画家の視点を中心に置いた世界像を確立させていたのです。
人物は大きく重々しく、しっかり描かれており、空間的な遠近法、直接的な光線、淡彩明暗画法により、線を使わずに、光と色で輪郭

を表現しています。その結果、人物の感情が顔と動作に現れており、現実的な表現になっているのです。
周りからの評判を気にせず、身の回りにも無頓着な画家でしたが、その作品に感動した多くのフィレンツェ人が居たことも確かです。画家の死後、大勢の画家の卵がその画法を学びに遺作の下に通ったのです。その中にはミケランジェロも居ました。
この異端児の正式名はトマソ（Tommaso di Ser Giovanni di Simone）でしたが、マサッチョと呼ばれる若者でした。
ヴァザーリ（Giorgio Vasari）はその「画家・彫刻家・建築家列伝」（*Lives of the most eminent painters sculptors & architects*）でマサッチョのことを「15 世紀のイタリアの画家で最大の画家」と称賛しています。
ゴティック様式から、ルネサンス様式への過渡期の画家だったのです。

２．マサッチョ

1401 年 12 月 21 日の生まれで、1428 年の夏に死んでいます。
フィレンツェ とアレッツォ（Arezzo）の丁度中間地にあるサン・ジョヴァンニ・ヴァルダルノ（San Giovanni Valdarno）という小さな村で生まれました。
名を成した画家の場合には、死去した年月日は判明していながらも、生年月日が不明な例が多く見られます。しかしながら、マサッチョの場合は反対に、生年月日が明確に分かっていながら、死亡年月日が不明なのです。珍しい例と言えるでしょう。
正式名は Tommaso di Ser Giovanni di Simone　です。
トンマーゾの通称としてマサッチョと呼ばれていますが、これには「ガサツな・かまわない」といった意味があるようです。
4 歳の時に父親が他界し、その年に弟のジョヴァンニ（Giovanni ）が生まれています。この弟も後に画家となり、スケッジャ（Lo Scheggia）と呼ばれました。
12 歳でフィレンツェに出てきており、画家の修業をしていたと推定されますが、21 歳の 1422 年 1 月 7 日にギルド(Arte de’Medici e Speziali)に職人として登録されるまでの経緯は不明です。ジョット（Giotto）の作品を学び、ドナテッロ（Donatello）と親交があったと言われています。1424 年には画家の組合である、ルカ組合（Compagnia di San Luca）に所属しています。
マソリーノ（Masolino da Pinacale）と共同で制作する機会が多く、マソリーノが年長者であることから、マサッチョはその弟子であったとする説や、時代的背景からマソリーノがマサッチョの弟子だっ

たとするなど、色々な説があります。
二人は共同して制作していますが、師匠と弟子の関係ではありませんでした。
主な作品は以下のとおりです。

1．「サン・ジョヴェナーレ」（San Giovenale）三連祭壇画
　　1422 年
2．「聖アンナと聖母子」　（Madonna col Bambino e Sant‘Anna）
　　1424/25 年
3．「貢の銭」・「影で患者を癒す聖ピエトロ」・「楽園追放」　等、
　　ブランカッチ（Brancacci ）礼拝堂内
　　1425 年　以降
4．「玉座の聖母子」（Madonna in torono col Bambino　：Polittico di Pisa）　1426 年
5．「カッシーニの聖母子」　（Madonna Casini）
　　1426 年
6．「聖三位一体」　Santa Maria Novella　聖堂内
　　1427 年
7．「聖ヒエロニムスと洗礼者聖ヨハネ」　（San Girolamo e San Giovanni Battista ）
　　1428 年
8．「キリストの磔刑」　ローマの聖 Clemente 聖堂内　　遺作
　　1428 年

３．聖母子

革新的な画法をもって世の中を驚かし、一世を風靡したとはいえ、マサッチョも時の子です。
15 世紀の初めに、画家として世間に評価され、独り立ちしていくためには、親方の下に弟子入りし、数年間下働きをしたのちに、ギルドに登録されることが必須でした。
自身が親方となり、徒弟を雇って一家を成すのが画家としての本懐と言えます。
それには、依頼者の要望や好みに応えて作品が描き分けられることが重要でした。
当時の世間が画家に求める作品は宗教画であり、聖堂に収納されるような大きな作品から、個人が所蔵して崇敬の対象とするような小品まで、「聖母子」を描くことが求められていました。
マサッチョも残された数少ない作品の中で、聖母子を描いています。
以下、年代順に見ていきます。

１．サン・ジョヴェナーレ三連祭壇画（Trittico di San Giovenale）

1422 年　4 月 23 日

マサッチョ美術館（Museo Masaccio　Cascia di Reggello）

ギルドに所属して間もなくの作品で、現存するマサッチョの最初の作品と看做されています。

中央に聖母子が正面を向いて座し、下には両脇から天使が聖母子を見上げています。
左には聖バルトロメオ（San Bartolomeo）と聖ビアージョ（San Biagio)の立像が描かれ、右には聖ジョベナーレ（San Giovenale）と聖アントニオ（San Antonio Abate）の立像が描かれています。
左右均衡のとれた構成で、短縮遠近法や立体的な表現にマサッチョの画風の兆しを読みとることができます。しかしながら、後の作品のような自然な人体表現がいまだ不十分だと見られるのは、国際ゴティック様式の作品が求められていたからだと思われます。
中央に描かれている幼子キリストは右手の人差し指と中指を口に入れています。

これは、おしゃぶりをしているのではなく、聖体拝領の象徴である

ぶどうを口に含んでいるのです。

聖体拝領
イエス‐キリストが最後の晩餐で、パンと葡萄酒をとり、「これ我が身体なり、我が血なり」と言ったことに基づき、ミサの際にキリストの血と肉とをあらわす葡萄酒とパンとを会衆に分かつ儀式を指します。

２．聖アンナと聖母子（聖家族）
（Madonna col Bambino e Sant‘Anna）
1423 年頃　　ウフィツィ美術館所蔵

13 世紀になると聖母の母親であるアンナに対する祝祭が盛んになってきます。その結果、幼子キリスト・聖母・聖アンナの三代を一緒に組み合わせた「聖家族」の構図が生まれるようになります。
聖アンナの膝に聖母子が座る型、聖母子の後ろに聖アンナが座る型、の縦型、と幼子キリストの両脇に聖母と聖アンナが位置する横型、の二つのタイプが描かれるようになります。
「聖アンナと聖母子」は、マソリーノとの共同制作の作品と看做されています。

マソリーノは聖アンナとその背景の天使を描いています。
背景の天使は色彩も単調なうえ平面的で存在感は有りません。
聖アンナの左手がかろうじて立体的に描かれており、右手を聖母の肩に触れていることで、聖母の背後に位置して存在していることを示しています。しかしながら、聖アンナは平面的な背景の中に埋もれており、絵画の中に居るように見えます。
一方で、マサッチョの描く聖母子は画面の前で浮き出て来るような立体的に描かれているために、聖母子との間に断絶が見られます。

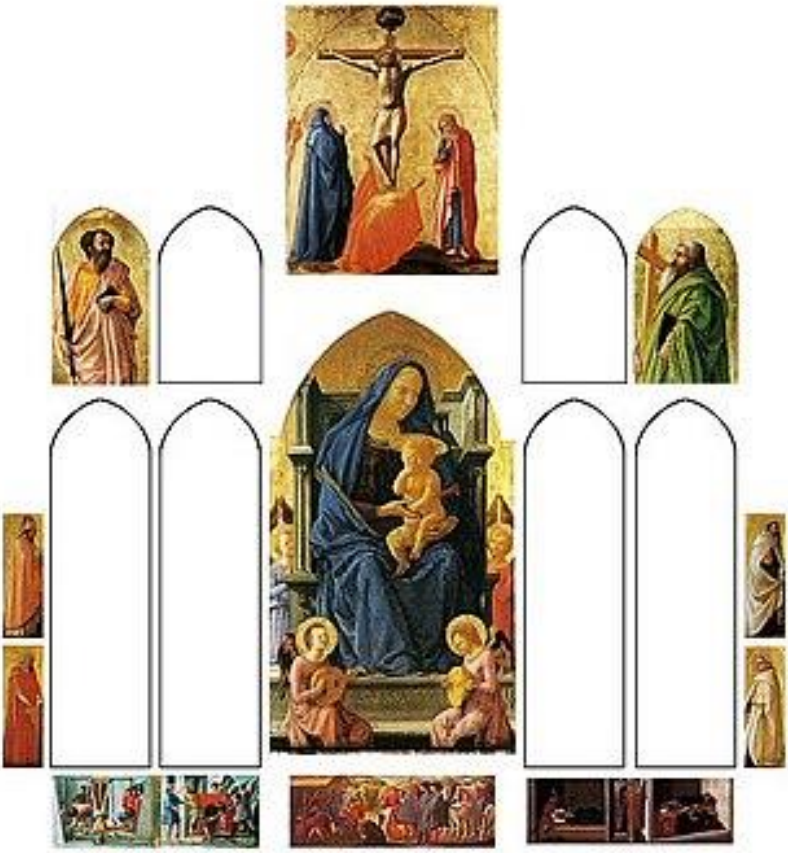
マサッチョの初期の作品とはいえ、聖母子には重厚さが認められ、現実の人間の存在を示していると言えます。
マサッチョが描き出した人物はそれまでの表面的な装飾とは異なっていることが良く判ります。
このように一つの画像を二人で描くと二人の画風の違いが如実に表れてしまいます。
これ以降、同じ画像を共同制作することはしていません。
（175x103cm）

４．玉座の聖母子

（Madonna in torono col Bambino　：　Polittico di Pisa）

1426 年

ピサの多翼祭壇画の全体構成図



多くの部分が逸失しているために、祭壇の構成を予測したものです。

ジュリアノ・ディ・コリーノ（Juliano di Colino）により依頼された、サンタマリア・デル・カルミネ（Santa Maria del Carmine）聖堂内にある、コリーノ家の礼拝堂に設置されていました。
聖母子は中央に配置され、その上にキリストの磔刑図があったと思われます。
周辺に聖パオロや聖アンドレアなどの聖人画と最下部には聖ピエトロの磔刑や東方三王の礼拝などが描かれたプデレッラが在りました。

聖母子の脇には恐らく奉納者を含む聖人像が描かれていたと思われますが、逸失しているので不明です。
なお、この多翼祭壇画の存在している部分も各美術館に散逸しています。
聖母子はロンドン、キリストの磔刑図はナポリ、聖パオロはピサ、聖アンドレアはマリブ、その他はベルリンの美術館所蔵です。
この多翼祭壇画には1426年2月19日の記

載があります。

聖母子は、多翼祭壇画の中央部分を構成していたと想定されています。
聖母の膝の上の幼子キリストは人間の赤ん坊が良くするしぐさである、指をおしゃぶりしているように見えますが、聖母が持つブドウを食べているのです。「サン・ジョヴェナーレ三連祭壇画」と比べると聖母がブドウを持っているところが描かれているので、分かり易いと思います。
ブドウは聖体拝領を示しています。
聖母子の下では二人の天使がリュートを奏でています。
聖母子の両脇の天使共々光輪と羽が無ければ現実に存在する人間のように描かれています。(135.5x73cm)　　撮影　筆者

５．カッシーニの聖母子（Madonna Casini）
1426 年　　ウィフィツ美術館所蔵

聖母子画の裏側に描かれた紋章により、注文主が枢機卿アントニオ・カッシーニ（Antonio Casini）で有ることが分かります。
アントニオ・カッシーニは 1426 年 5 月 26 日に枢機卿に選出されていますので、マサッチョはその後に描いたと推定されます。
聖母の表情は異なりますが、幼子キリストの表情はピサの祭壇画の

「玉座の聖母子」の表情に似ています。

聖母が幼子キリストの喉をくすぐっているという、人間らしさの溢れた、微笑ましいしぐさを描いています。
幼子キリストの笑い声が聞こえてきそうです。

裏面：

Coat of Arms of Cardinal Antonio Casini
紋章の上に枢機卿の赤い帽子が描かれています。(24.5x18.2cm)
小さな作品です。

コラム　1

キリストとブドウ

「サン・ジョヴェナーレ三連祭壇画」とピサの多翼祭壇画の「玉座の聖母子」では、聖母の膝の上で、幼子キリストがブドウを食べています。
多くの画家が聖母子画を描いている中で、マサッチョはこのように幼子キリストがブドウを頬張る聖画を二枚描いています。これは特記すべきことと言えます。
幼子キリストがブドウを食べている絵は管見ながら、マサッチョの前には描かれていません。16 世紀になってクラナッハ（Lucasu Cranach the Elder)が数枚描いていますが、それまでの期間にも、それ以降にも見られません。
葡萄とキリストとの関連が聖書によって明らかであるにも関わらず、このような表現が見られない事もまた非常に特殊と言えるでしょう。
幼子キリストは祝福のポーズをしているものが一番多く描かれています。
手に持つものとしては、鳩、柘榴、リング等が挙げられます。
聖書には、
ヨハネ福音書　15 章　1 節：「わたしはまことのブドウの木」
マルコ福音書　14 章 23 節：また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、かれらにお渡しになった。彼らはみなその杯から飲んだ。そして、イエスは言われた。「これは多くの人のために流される私の血、契約の血である。」　とあります。

アウグスティヌスは死によって人間の罪を贖うキリストを約束の地で摘まれ、葡萄搾り機に掛けられる「神秘のブドウの房」にたとえたことから、聖餐の比喩的な表現として、葡萄酒はキリストの血であると認識されます。従って、潰されるブドウはキリストと看做され、圧縮機から流れ出るブドウ汁はキリストの血と看做されるのです。

15 世紀にはキリスト受難劇でこのブドウ汁のように圧縮されるキリストはよく取り上げられました。

初期キリスト教美術における、ブドウの木の例です。
4 世紀の聖コンスタンツァの霊廟に見られるモザイクで、ブドウの収穫の場面とワイン造りを示しています。

撮影　筆者

クラナッハの聖母子　　Lucas Cranach　Elder

15１0/３５年ごろの聖母子画

幼子キリストはブドウを持っています

左から右へ

Thyssen Collection Lugano　1510

Archdiocesan Museum Wroclaw 1510

Mauritshuis DenHaag 1510

Alte Pinakothek Munich 1525

Pushkin Museum Moscow 1525

Eisenach Wartburg 1527/37

National Gallery of Art Washington 1535

参考　国際ゴティック様式の聖母子

１．ジェンティール・ダ・ファブリアーノ（Gentile da Fabriano）
聖母子（Madonna col Bambino ）1408 年頃
Gallaria dell’Umbria　ペルージャ（Perugia）

マサッチョと同時代に活躍したイタリアを代表する国際ゴティック様式の画家です。

金地の上に描かれた『聖母子』は信仰の対象として遠くから礼拝の対象としての画像として優雅に描かれています。聖母子の下には音楽を奏でる天使が小さく描かれています。
幼子キリストは柘榴を手に正面を見据えています。
この絵と比較するとマサッチョが表面的な装飾とは異なり、いかに現実の人間をよく見ていたかが判ります。
幾何学的遠近法は、単に現実の姿をそれらしく見せるだけでなく、画家の視点を中心に統一的な世界像を確立させるものとなったのです。

２．ゲラルド・スタルニーナ

（Gherardo Starnina、1354 年 - 1413 年）

J･ポール･ゲティ美術館（ J. Paul Getty Museum）

スタルニーナは国際ゴティック様式の画家として、イタリアでもてはやされた画家の一人です。

この作品は祭壇画として描かれた聖母子画です。

玉座の聖母子を中央に配置し、周囲に大勢の天使が描かれています。

天使の羽は鮮やかな色彩で描かれていますが、個々の天使に個性は有りません。

幼子キリストは赤ん坊としてではなく、小さな大人として描かれています。

なお、カルミネ聖堂内の聖ジロラモ（San Girolamo）礼拝堂に聖人を描いています。

ヴァザーリはその著書で、各地を巡ったが、特にスペイン滞在が長く、スペイン風の服装を描くとしています。

補足

聖母子と洗礼者聖ヨハネと大天使聖ミケーレ
（Madonna col Bambino　con Santi Giovanni e Michele）

この祭壇画は従来、ジョット派の作品と看做されていましたが、修道院がマサッチョの生誕地に近い場所にあることもあり、1906 年にマサッチョの少年時代の作品である、とされました。
ただし現在では作者はフランチェスコ・ダントニオ（Francesco D' Antonio）とされています。
しかしながら、現在でもマサッチョの作品だと主張する人も存在しています。

モンテマルチアーノ（Montemarciano）にある聖母修道院（Oratorio della Madonna delle Grazie）の祭壇画

4　ブランカッチ礼拝堂　　（Cappella Brancacci）
Santa Maria del Carmine

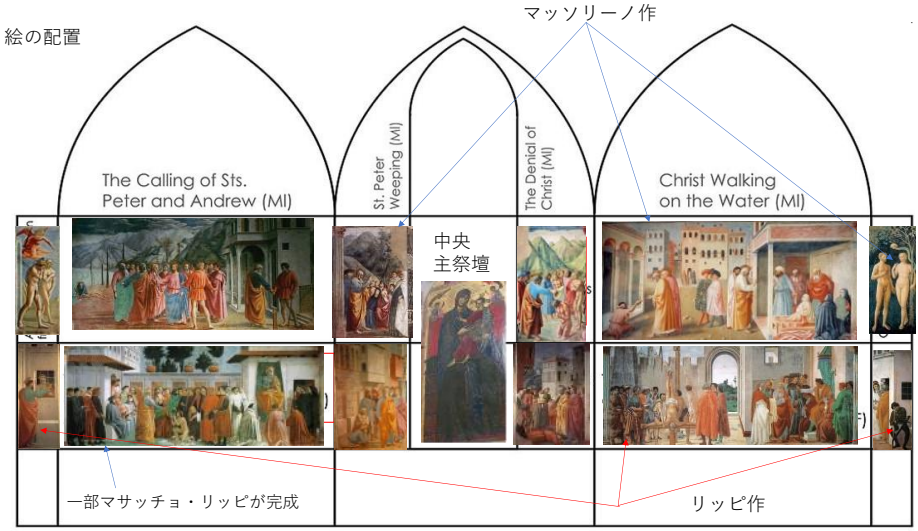
ブランカッチ（Brancacci）　家は羊毛を扱う商人として出発していますが、羊毛産業から絹織物に変更することで、フィレンツェでも有力な一族として名を連ねるようになります。
ブランカッチ家は 1367 年頃にサンタマリア・デル・カルミネ（Santa Maria del Carmine）聖堂に一族の礼拝堂を手配しています。
その後礼拝堂内の装飾に着手し、フェリーチェ（Felice di Michele Brancacci）が マソリーノの工房に、ブランカッチ家の守護聖人である、「聖ピエトロの生涯」を作成するように依頼しています。
その後マサッチョも参加してマソリーノと場面を手分けしてフレスコ画を描くことになります。
二人の共作と表現している書物も見られ、誤解されやすいのですが、一つの画像を二人で描くのではなく、一つの作品は一人で描いています。
ところが、マソリーノは 1425 年 9 月にハンガリーに向かっていますし、マサッチョも 1426 年の 2 月には既にフィレンツェを出てピサ（Pisa）に滞在しています。しかも当時、まだ壁画は完成していません。
このように礼拝堂の壁画が未完成のままで画家が現場を離れているのは、依頼主側の事情によると思われます。
理由として考えられるのは二点あります。一つは政治的な抗争により中断させられた場合、もう一つは依頼主の経済的な問題です。
当時北イタリアの都市国家は教皇派（Guelph）と皇帝派（Ghibelline）

に分かれて抗争を繰り返していましたが、フィレンツェ市内でも有力な商人たちは皇帝派と教皇派に分かれて市政の掌握を巡り競い合っていました。
ブランカッチ 家は教皇派で、メディチ家は皇帝派で、当主のコシモ・ディ・メディチ（Cosimo di Medici）とは敵対する関係にありました。勢力を持っていたコシモ・ディ・メディチは 1433 年の政変でフィレンツェから追放されますが、翌年戻り、反対にブランカッチ家がフィレンツェから追放されることになります。
ブランカッチ家は 1434 年まではフィレンツェに存在していましたので、1425 年の時点で制作を中止させた理由が政争によるものとは考えにくいと思われます。
ブランカッチ礼拝堂の壁画の制作が 1425 年頃に断念されたのは羊毛貿易の世界的な不況に由るものと思われます。
ブランカッチ家がフィレンツェに戻った 1480 年以降、50 年以上の空白の後に、礼拝堂の壁画制作が再開されます。既に他界したマサッチョに変わり、フィリッポ・リッピ（Firippino Lippi）により完成させられたのです。

サンタマリア・カルミネ聖堂　正面と中庭

ブランカッチ礼拝堂内部
主祭壇と右側壁

撮影：　筆者



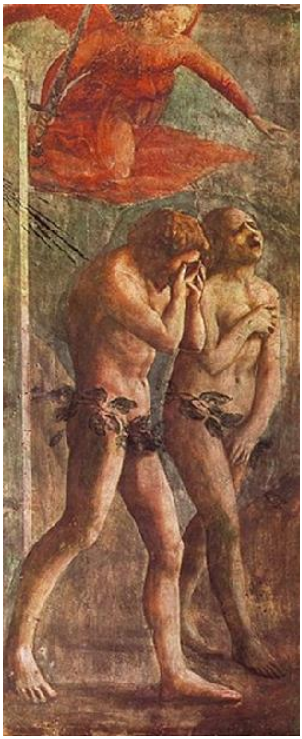
マサッチョの作品

１．楽園追放　　（The Expulsion from the Garden of Eden）
（La Cacciata dal Paradiso）

アダムとエヴァを楽園から追放している智天使（ケルビム）は剣を持ち、林檎の色の赤い服を着ています。
今正に追放された、左に見える楽園の門はマサッチョの創作とされます。

アダムは顔を覆い、エヴァの言葉を信じて行動を共にしたことへの深い後悔の念と、罪の深さを感じ、楽園を追放されたことへの悲しみが現われています。
一方で、エヴァの悲しみは主体的とは思われず、右手で胸を覆い左手で陰部を覆うことで、性的な罪を現わし、悲しみより恥ずかしさが勝っているように見えます。
足もとには影が描かれており、足は大地を踏みしめていることが分かります。この一見当然ともいえる影の表現は、光が一方向から当たっていることを現わしています。この一方向から光が当たると言う表現が新鮮なのです。

1652 年に付け加えられた陰部を覆っていた「葉」は 1988 年の改修時に取り除かれました。従いまして、20 世紀後半までに出版された美術書や解説書では当然ながらまだ陰部が覆われた図版が用いられていました。
（208 x 88 c m）



誘惑　　（Temptation）
（Tentazione di Adam ed Eva）

正面の祭壇に向かって右側にマソリーノの「誘惑」が掲げられ、左側にマサッチョの「楽園追放」が配置されています。
楽園の中で裸体の姿でいることを感じていないアダムとエヴァ、と楽園を追放されて裸体を認識したアダムとエヴァは対峙して描かれています。

マソリーノの描くアダムとエヴァは人間の理想像を求めたような長身で、足の長さは解剖学的にも異常な長さです。端正な描写は正に国際ゴティック様式と言えるでしょう。
マサッチョの描くアダムとエヴァと比較するとその差は歴然です。
足元を見ると、アダムもエヴァもつま先立ちしているようで、影もなく、大地に足がついていません。人体の重力感も感じられず、浮遊しているように見えます。
国際ゴティック様式で描くとこのように現実離れしているのでしょうか。それともアダムとエヴァは楽園に居る間は地上を浮遊していたと想定して、このように描いたのでしょうか。
(208x88cm)

２．貢の銭　　（The Tribute Money）
（Pagamento del tributo）

作品はマタイ福音書(17:24-27) を基にした場面が描かれています。収税史が神殿税を求めてくると、キリストは聖ピエトロに命じて魚を捕獲させます。その魚の中に銀貨が入っており、それを納めさせています。

異なる時間帯を同一画面で表現しており、聖ピエトロが三回描かれる、三場面の構成です。

左端：聖ピエトロが魚の中から銭を取り出しています。かがみこむ聖ピエトロの足に注目です。
中央：キリストを中心に聖十二使徒が半円形に描かれています。右の後ろ向きで短い服を着た収税史が貢の銭を要求しています。
右端：聖ピエトロが収税史に貢銭を渡しています。

この絵は中央のキリストの頭部を一つの消失点とする一点透視図法で描かれたマサッチョの代表作品です。
聖十二使徒は光が特定の場所から射すことでできる影を描くことで人物に立体感を与える明暗法（キアロスクーロ）で描かれています。また背景の山を薄青く描くことで距離感を出す、空気遠近法と呼ばれる手法を使っています。
なお、ヴァザーリは聖十二使徒の中の聖トマスはマサッチョの自画像だとしています。
32 ジョルナーティ認められます。
１ケ月以上かけて制作したことが分かりますが、画面の大きさからみて驚嘆すべき速筆です。
（255x598cm）

３．新信者の洗礼　　（Baptism of the Neophytes）
（Battesimo dei neofiti）

聖ピエトロから洗礼を受けている人物の濡れた頭髪や筋肉質の体格表現、その後ろで、寒さに震えながら次に洗礼を待つ人物のしぐさと表情は、現代人の目から見れば特に注目するには値しないと思われます。

しかしながら、同時代人のみならず多くの後世の画家たちは、人間を集団として把握するのではなく、人間一人一人に注目し、そのしぐさを自然に表現していることの革新性に驚嘆したのです。この技術を学びに礼拝堂に通ったとされているのです。
洗礼を施している、聖ピエトロの衣の豊な表現など、全て現実に存在している人物のように描かれています。
マサッチョは人物表現に、同時代人のドナテッロの彫刻を参考にしたと言われています。

背景の山は空気遠近法により、薄い青色で描かれています。
なお、聖ピエトロの左後方の二人はブランカッチ一族と見られています。
施主が制作を依頼した作品の中に、その場面に居たかのように自らの像を描き込むよう、画家に依頼することは、よくあることです。同時代人には誰であるかが認識できたでしょうから、自らを示すことで名誉心を満足させ、絵と共に後世に残ることを期待したのです。
(255x162cm)

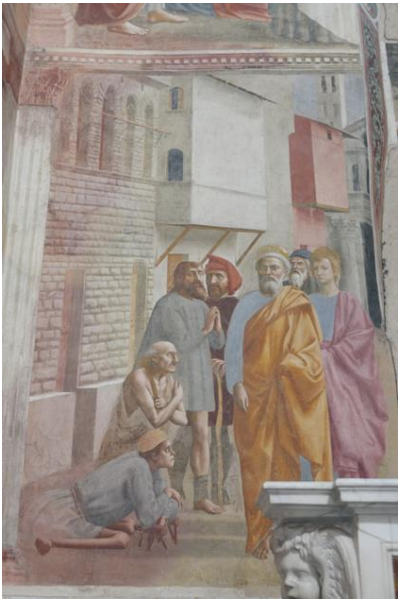
４．影で病人を癒す聖ピエトロ

（St Peter Healing the Sick with His Shadow）

（San Pietro risana gli infermi con la sua ombra）

聖ピエトロの奇跡譚を表現しています。

使徒言行録 5：15-16　を基にしています。
『人々は病人を大通りに運び出し、担架や床に寝かせた。ペテロが通りかかるとき、せめてその影だけでも病人のだれかにかかるようにした。』



遠近法で描かれた街路には、やせ細った病人と思える老人と、その前には脚が萎えた患者がうずくまって、聖ピエトロが来るのを待っています。
聖ピエトロの影が患者の患部に当たると、その病を癒すと信じられていたからです。

聖ピエトロの後方に従う聖ヨハネはマサッチョの弟がモデルだと言われています。
その後ろの白髭の老人はドナテッロで、赤いターバンの男はマソリーノだとされています。　（230x162cm）

５．布施とアナニアの死
（ The Distribution of Almas and Death of Ananias）
（Distribuzione delle elemosine e morte di Anania）

聖ピエトロの奇跡譚を表現しています。

使徒言行録４：32、５：1~11　を基にしています。　　（概略）
『アナニアという男は妻と相談して土地を売り、その代金の一部を全部だと偽って使徒の足元に差し出した。　「なぜ、サタンに心を奪われ、聖霊を欺いて代金をごまかしたのか。あなたは人間を欺いたのではなく、神を欺いたのだ。」ペテロの言葉を聞くとアナニアは倒れて息絶えてしまいます。

夫の埋葬後、子供を抱えた妻は夫の死を知らずに来て、ペテロから「二人で示し合わせて主の霊を試すとは何としたことか。」と言われその場で息絶えた。』とされています。

聖ピエトロの足元に伏せているのが聖ピエトロに詰問され、息絶えたアナニアです。
聖ピエトロの前で子供を抱いている女性はその妻です。
妻と子が到着した時にはアナニアの葬儀は済んでいますので、遺体は存在していません。異なる時間を同一画面に表しています。

６．テオフィルスの息子の蘇生と教座の聖ピエトロ
（Raising of the Son of Theophilus and St Peter Enthroned）
（Resurrezione del figlio dei Teofilo e San Pietro in cattedra）

聖ピエトロの奇跡譚を表現しています。

「黄金伝説」をもとにしています。
伝説によると、聖ピエトロは牢獄から解放後に 14 年前に死去したテオフィルスの息子を蘇生させ、その奇跡を崇めて教会堂が建設されたとされています。

伝説をもとにして、ミラノ公のヴィスコンティ（Gian Galeazzo Visconti）とフィレンツェとの戦闘が終了したことを祝った政治的な絵になっています。

左端の一段高いところに座るのがテオフィルスである、ミラノ公で、その右手前に座るのが、フィレンツェの書記官長で人文主義者のコルッチョ・サルターティ（Coluccio Salutati ）とされています。
多くの人の前で裸体の姿で膝まづいているのが蘇生したテオフィルスの息子です。
この絵の右側にある、聖ピエトロの右に描かれた四人の群像は前からマッソリーノ、マサッチョ自身、アルベルティ（Leon Battista Alberti)、ブルネレスキ（Filippo Brunelleschi）だとされています。

この作品は途中で放棄され、リッピが完成させています。

補足　　自画像

左から
「テオフィルスの息子の蘇生と教座の聖ピエトロ」の群衆の一人
「貢の銭」の聖十二使徒の一人聖トマス
この二人は古来、マサッチョの自画像とされてきました。

左：「貢の銭」の収税史と　　右：「ピサの多翼祭壇画の聖母子」の足元でリュートを奏でる天使、もまたよく似た存在です。

自画像に見られる筋の通った鼻。丸い顎。大きく鋭い目。
目の下のクマ。丸い頭。ぼさぼさの頭髪。
類似点が多いように思われます

コラム　　2

楽園を追放されるアダムとエヴァ

モデナ（Modena ）の大聖堂正面の浮きぼり彫刻

天使の階位（天上位階論）
熾天使
智天使（ケルビム）は楽園から追い出す
役割を果たしています
座天使
主天使
力天使
能天使
権天使
大天使
天使

聖書：創世記 3 章 24 節
こうしてアダムを追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎をおかれた。

ウィリゲルモ（ Wiligelmo）12 世紀初頭のイタリア最初の彫刻家であり、名前が明示された彫刻家と言われています。

撮影：筆者

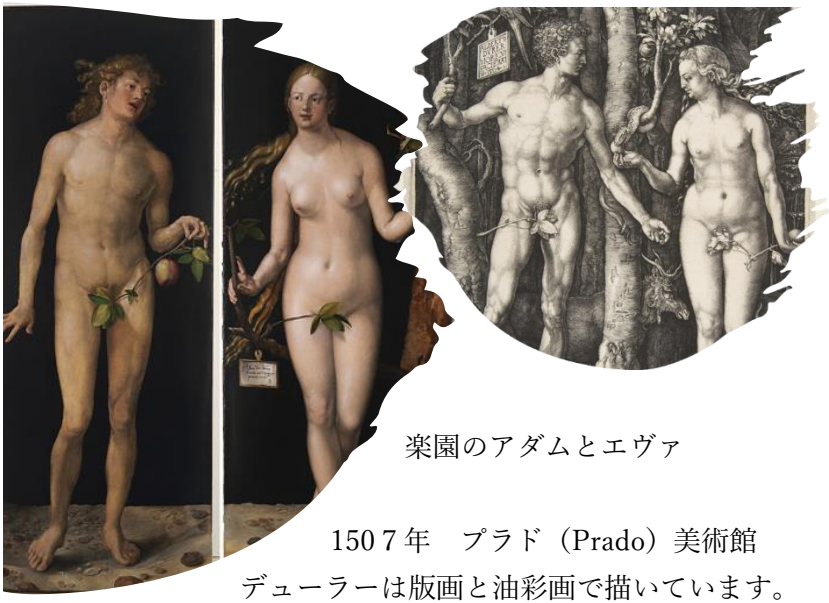
楽園を追放されるアダムとエヴァ

・ミケランジェロ（Michelangelo）のアダムとエヴァ　1508-12 年
ヴァティカンのシステナ礼拝堂の天井に、聖書を基にして創世記からの歴史をまとめて現わした壮大な作品の一場面です。
左では禁断の実を食べるアダムとエヴァが、右には赤い服を着た智天使に楽園を追放されるアダムとエヴァが描かれています。

マサッチョ の約 100 年後の作品です。知恵の実とは性を知る実だったのです。

・アルブレヒト・デューラー
（Albrecht Durer）
銅版画：1504 年

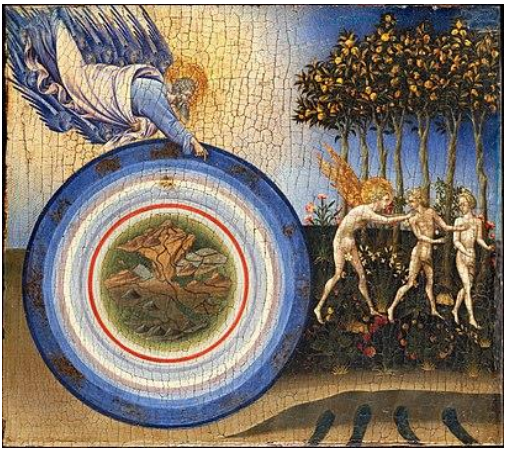
智天使に追放されるアダムとエヴァ。



楽園のアダムとエヴァ

150 7 年　プラド（Prado）美術館
デューラーは版画と油彩画で描いています。

・エヴァジョヴァンニ・ディ・パオロ　（Giovanni di Paolo）
1438 年頃



神の指し示す円盤は宇宙を現わしています。
宇宙の中に、光が射し込み、空と陸と水とが分かたれ、天地創造により楽園が創造されたことを現わしています。

楽園には金色に輝く木の実が描かれ、大地には花が咲き乱れ、動物が集い、4本の川が流れ出ています。
アダムとエヴァを楽園から追放する智天使までが裸体で股間を覆って描かれているのは奇妙です。

・『ベリー公の豪華な時祷書』挿絵
　　1416年以前　　コンデ美術館

楽園は緑豊かな丸い円で描かれています。周囲を外海が取り囲んでいるようです。
中央にあるのは命の泉の湧き出る塔です。
楽園の門からアダムとエヴァを追い出す智天使は赤い服を着ています。
追放されたアダムとエヴァは性を認識したことが明らかであったことが見て取れます。
異なる時間帯を同一画面に描くのは、物語の展開を示す際に多く見られる表現方法です。
左から反時計回りに物語は進んでいます。

補足　　楽園で食べた「木の実」

聖書
創世記３章６節、７節。
「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、「目を引き付け賢くなるように唆したので、女は実をとって食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。二人の目は開け、自分たちが裸で有ることを知り、二人はイチジクの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。」
古来、アダムとエヴァが楽園で食べた「木の実」は「リンゴ」だとされてきました。ところが聖書の中で言われているのは「木の実」であり、「リンゴ」とは明記されていません。
聖書植物学者にとっては、もっとも厄介な問題の一つだそうです。「リンゴ」とする学者も多いそうですが、パレスチナ方面ではどこにも野生のリンゴは無いそうです。オレンジではないかとの説もありますが、同じくパレスチナで栽培されたとは記録されていません。「木の実」という表現や聖書の時代にも存在していたか否か、等すべての条件に合うのは「アンズ」だとされています。キプロスのアンズは現在でも「金色のリンゴ」と呼ばれているそうです。
ただしアダムとエヴァが食べたのは「アンズ」だった、と言われても多くの人は「リンゴ」だ、と思い続けることでしょう。

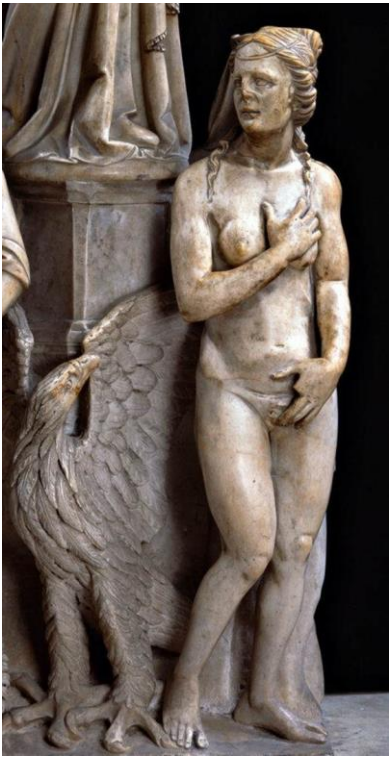
出典：聖書の植物事典　　H.&A.モンデルケ著　八坂書房　2014年

コラム　　3

女神の裸体像

ギリシャの彫刻家のプラクシテレス（Praxiteles）が初めて女性の裸体像を制作したとされており、それはギリシャの女神アフロディテ（ヴィーナス）だとされています。
女神の裸体像もそのしぐさが異なります。

マサッチョがブランカッチ礼拝堂の楽園追放のエヴァの参考にしたのは、立像のなかでも「恥じらいのしぐさ」（Pudica）と呼ばれるポーズです。
手の位置により数種類に分かれます。
なお、女神像には「うずくまる姿」の裸体像もあります。
ローマ時代にギリシャのコピーが多く制作されています。
この像は 2 世紀ころのローマンコピーです。大英博物館蔵　　撮影：筆者



ピサ（Pisa）の説教壇にあるジョヴァンニ・ピサノ（Giovanni Pisano）の作品です。1302-10 年貞節（Prudence）の擬人化像とされています。

マサッチョが参考にしたのは、この像だと見做されています。
マサッチョはピサに滞在してサンタマリア・デル・カルミネ聖堂内にある、コリーノ家の礼拝堂に多翼祭壇画を描いていますが、ピサに行ったのは、ブランカッチ礼拝堂を描いた後です。
マサッチョはこの像を先に見ていたのでしょうか。
ただし、このポーズはよく見かけます。

説教壇　全体

左：
クニドス（Knidos:Cnidus）のアフロディテ女神像
紀元前 4 世紀のギリシャのプラクシテレス（Praxiteles）の作品です。

全身像の女性裸体像として初めての作品とされています。

アフロディテはプラクシテレスの枕元に出現し、「いつ私の裸体を見たのか」と詰問したという伝承が残っています

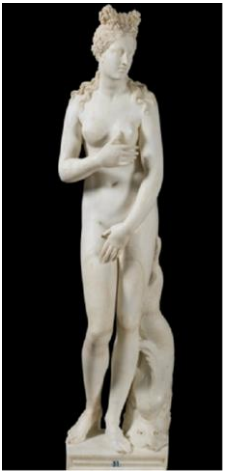
右：
コロンナ（Colonna）のビーナス像
プラクシテレスの作品を基に 2 世紀にローマで制作されたコピーです。
ヴァティカン所蔵

左手で脱衣を持ち、右手で陰部を覆っています。

Pudica type でもこのしぐさが多く見られます

メディチのビーナス
Venus de‘Medici
ウィフィツ美術館

カピトリーネのビーナス
Capitorine Museum Rome



プラド美術館
カピトリーネの作品
を基にしています

Campo Lemini のビーナス
大英博物館

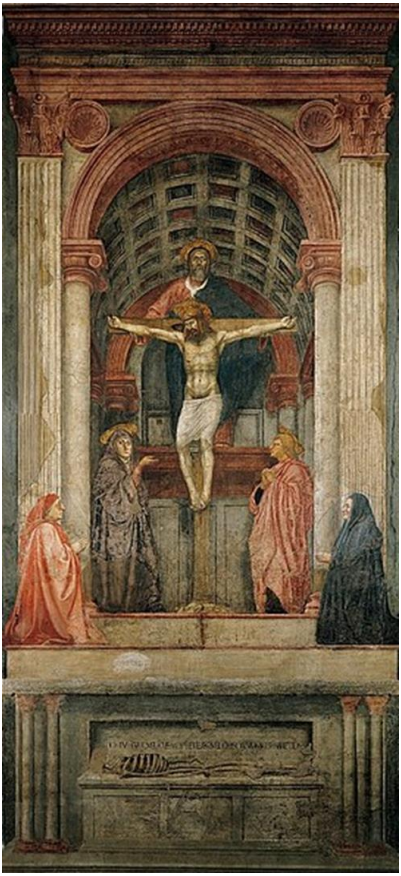
ボッティチェルッリの「ビーナスの誕生」

5.　「聖三位一体」　　The Hoy Trinity　　Trinidad
Santa Maria Novella

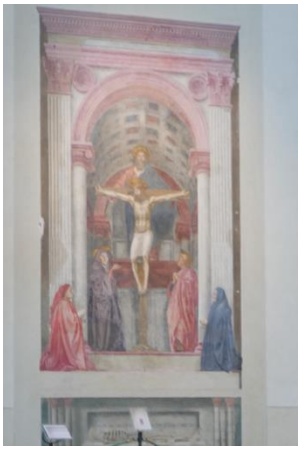
サンタマリア・ノヴェッラ聖堂は、9 世紀には既に存在していたようです。その聖堂がドメニコ会に所属することになった後、1279 年になって増改築が始まりました。従来の聖堂正面を南向きに変更しています。
1357 年に三廊式で長さが 100 メートルもある大きな聖堂として完成しています。主祭壇の脇には二か所ずつ礼拝堂が並び、T 字型をしています。
西側に接続する回廊には「ドメニコ会の活動と勝利の寓意」（Allegory of the Active and Triumphant Church and of the Dominican order）と題する巨大なフレスコ画が掛けられています。1367 年頃のボナイウート（Andrea di Bonaiuto）の作品です。
1420 年に教皇マルティーノ 5 世により聖別されました。
東西教会の分裂の収拾を目指した第 17 会公会議が 1438 年にフェッラーラ（Ferara）で開催されましたが、ビザンティンからの大勢の出席者の受け入れなどの財政的な面と、疫病を回避する観点から翌年フィレンツェに移行され、この聖堂で公会議の討議が行われました。
東西教会の意見不一致のなかでも「フェリオクェ問題」は難問でした。正面扉口から数えて左側廊の 2～3 番目の支柱の間の平信徒用の場所に「聖三位一体」は掲げられていました。

フィレンツェの鉄道の駅名はこの聖堂と同じ（Firenze Santa Maria Novella）です。駅を出ると駅前に広場があり、そのまま進むと聖堂の後陣が見えてきます。
聖堂の正面はアルベルティ（Leon Battista Alberti）1470 年の作です。
写真は聖堂の正面です。　　（撮影　筆者）

当初の聖堂は、主祭壇から内陣までの聖職者用の場所と、聖堂の正面扉口近くの平信徒用の場所とが、間仕切り衝立により二分されていました。
1567 年コジモ 1 世の命により、聖堂の大改造が行われ、ヴァザーリの指導の下で内装は改められ、間仕切り衝立が撤去されたことで、現在のように正面扉口から奥の主祭壇までが見通せるようになりました。
正面の主祭壇奥のステンドグラスの他周壁にあるステンドグラスは、14 世紀から 15 世紀のものです。

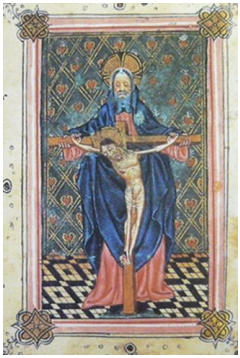


「聖三位一体」はサンタマリア・ノヴェッラ聖堂の左側廊に 1427 年頃に描かれた作品です。
両脇の円柱形の片蓋柱が蒲鉾型天井を支える礼拝堂の前で、父なる神が磔刑のキリストを両手で支えて立ち、父なる神からキリストに向かって聖霊が鳩の形をして真直ぐにくだっています。
キリストは穏やかな表情で目を閉じてうなだれています。
左手に立つ聖母は毅然として右手でキリストを指し示し、右手に立つ福音書記者聖ヨハネは悲しみの表情でキリストを見上げています。
一段下の祠の外側に奉納者夫妻が向かい合って膝まづいて描かれています。
更に下の床下には骸骨が横たわり、そこが奉納者一族の墓所であるかのように描かれています。
高さ 6.4 メートル、幅は 3.17 メートルある巨大なフレスコ画です。



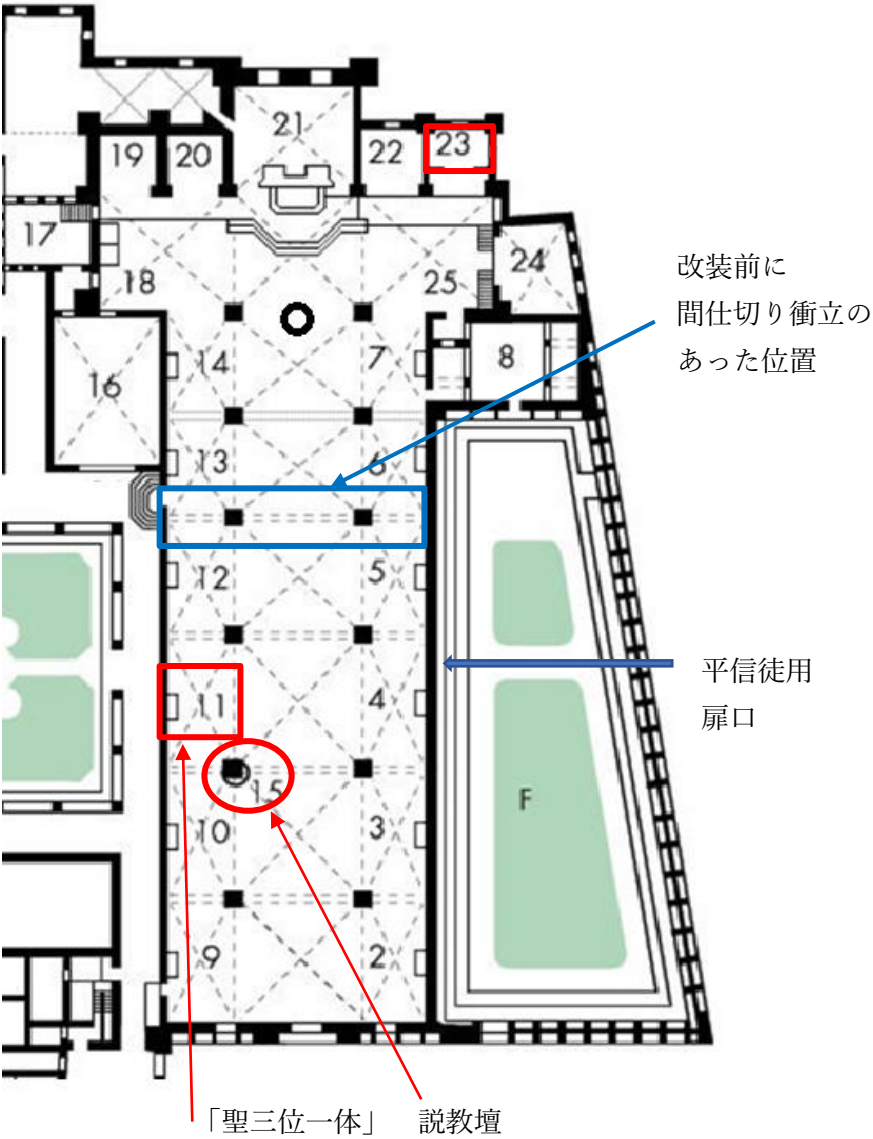
撮影　　筆者

マサッチョ作の「聖三位一体」はブルネレスキ（Filippo Brunelleschi）が 1443 年に制作した平信徒用の説教壇の右手奥の左側廊に位置しています。
当時の聖堂の平信徒用の扉口は右側面にあったので、扉口から聖堂に入った信者はその正面に描かれた「聖三位一体」画像を見て、そこに奥行きの有る祭壇が置かれていると思ったことでしょう。



なお、聖三位一体には父なる神が立って磔刑のキリストを支える型、座って支える型、直接抱く型など色々な構成がみられます。
左は 1410 年頃の個人蔵の時祷書です。

Santa Maria Novell 聖堂の内部構造



1 Birth of Christ （Botticelli）
2 Martyrdom of Saint Laurence (Girolamo Macchietti)
3 Adoration of the Shepherds (Giovan Battista Naldini)
4 Presentation in the temple (Giovan Battista Naldini)
5 Descent from the Cross (Giovan Battista Naldini)
6 The Predictions of Vincent Ferrer (Jacopo Coppi del Meglio)
7 Jacopo Ligozzi
8 Chapel of the Pure (Wooden crucifix by Baccio da Montelupo)
9 Resurrection of Lazarus (Santi di Tito)
10 The Good Samaritan (Alessandro Allori)
11 The Holy Trinity (Masaccio)
12 Resurrection of Christ (Giorgio Vasari)
13 Altar: Poccetti
14 Saint Hyacinth (Alessandro Allori)
15 Pulpit-Filippo Brunelleschi / Buggiano
16 Sacristy
17 Chapel Strozzi of Mantua (Delivery of the Keys to Saint Peter ,by Orcagna)
18 Chapel of the Bell Tower
19 Chapel Gaddi
20 Chapel Gondi
21 Chapel Tornabuoni: Maggiore (Life of Virgin and St. John the Baptist, by Ghirlandaio)
22 Chapel of Filippo Strozzi
23 Chapel Bardi (Madonna del Rosario,by Vasari, once covered the Holy Trinity.)
24 Chapel Rucellai (Majesty Rucellai ,by Duccio di Buoninsegna)
25 Envelopes of Saint Antonino
O Cross of Giotto

「聖三位一体」の数奇な運命

1567 年から、ヴァザーリの指導の下で、聖堂の大改造が行われましたが、聖堂の改造計画が進む中で、1568 年にカッポーニ（Camilla Recco Capponi ）の妻が聖母子に奉献した祭壇の設置を希望しました。

そこで、ヴァザーリが「聖三位一体」のフレスコ画の前に、自身の描いた聖母子画（Madonna del Rosary）を掲げて新たな祭壇を設置したのです。

そのために「聖三位一体」は隠れてしまい、その存在は忘れ去られ

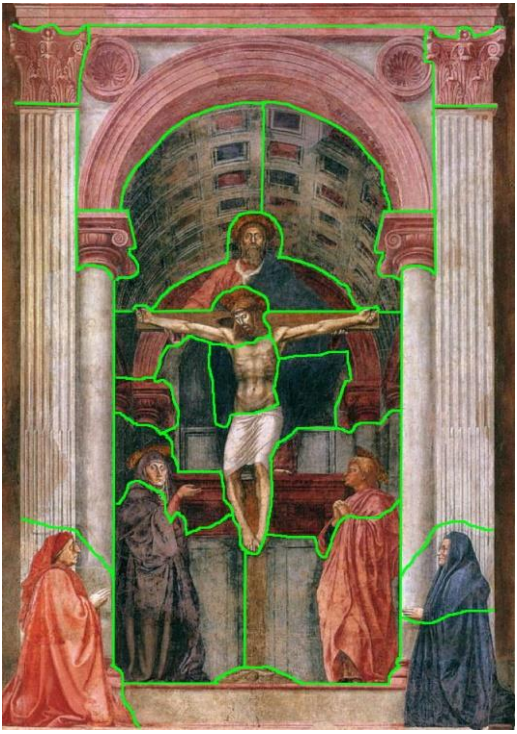
てしまいます。
マサッチョに対して最高の賛辞を送っていながら、「聖三位一体」の前に自分の絵を置いて隠してしまったヴァザーリにも困ったものです。
1860 年になって「聖三位一体」は発見されますが、フレスコ画の劣化は相当ひどかったようです。フレスコ画の前に置かれていた石造の祭壇を破壊することなくフレスコ画を修復することができなかったので、いったん「聖三位一体」を奥の壁面に移設しています。
1952 年には祭壇を移設したことで、「聖三位一体」の下に描かれていた「骸骨」が新たに発見されました。
「聖三位一体」が元あった場所に再度移されることにより、「骸骨」と一体化し、当初の姿が復活しました。
完成したのは 1954 年のことです。
なお、「聖三位一体」の前に置かれていたヴァザーリの「聖母子画」は現在ではバルディ礼拝堂（Capella di Bardi）で見ることができます。

１．聖三位一体の技法

（１）フレスコ画

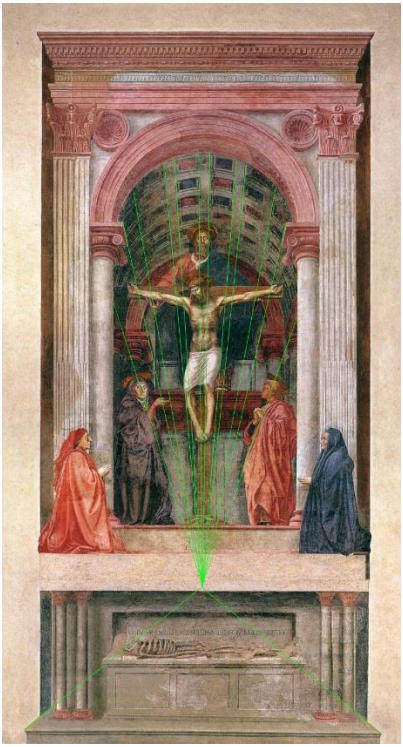
マサッチョはこの「聖三位一体」をサンタマリア・ノヴェッラ聖堂の壁にフレスコ画で描くに当たり、23～24 回に分けて描いたと考えられています。

この下に髑髏を描いていますので、最初の下絵から完成まで最短でも一か月以上かかったことになります。
フレスコ画は壁に漆喰を塗り、乾かない内に彩色していきます。従って、描ける一日分の範囲はおのずと決まってきます。
詳細な部分は描ける範囲は狭くなり、柱のような単調な部分は広範囲に描くことができます。注意深く観察すると境目に盛り上がりが見られます。
この一日に描ける範囲をジョルナーテ（Giornate ）と呼びます。
下の図は 1950 年のティントーリ（Leonetto Tintori）による分析で、緑の線で囲まれた範囲が一日分とされています。
ただし発見された当時は剥離も激しかったので正確なところは判明していません。



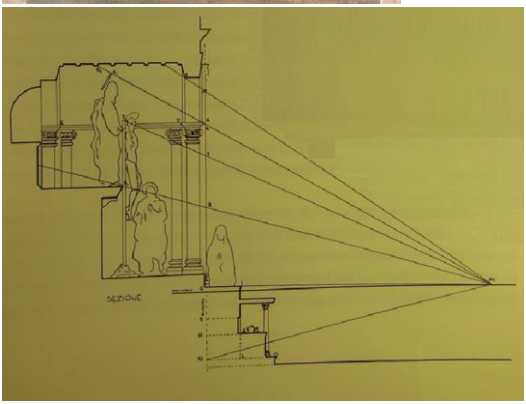
出典は次ページ共に、
Lucoano Berti, *Masaccio,*Pencilbania Univ. 1976.

（２）一点透視画法



大人の、平均的な背の高さの人物の目の高さを基準として、「聖三位一体」を見上げた場合、天井は一点透視画法で描かれているのが分かります。
正確な描写から、ブルネレスキが構成に大きく参画したとの説や、更に進んで、一部分を描いたと見做す学者もいます。

消失点です。



側面から見るとこのような奥行きを持った祭壇を予測して描かれていました。

立った大人
の目の高さ

２．祠の外に描かれた奉納者

赤いターバンを巻いた奉納者はロレンツォ・ディ・ピエロ・レンツィ（Lorenzo di Piero Lenzi）と看做されます。

奉納者がこのようにフレスコ画の中に描かれるのは、自身が制作に貢献した作品が後世に残るとともに、自らの存在も同様に後世に残ることを希望したからです。

ところで、奉納者については、諸説あります。ただし、いずれにしても夫人のことは判っていません。

説１．1570 年代に作成されたビリオッティ（Fra Modesto Biliotti）の年代記によると、カルドーニ（Fra Lorenzo Cardoni）が 1422 年から 1425 年の間に、「聖三位一体」の祭壇を造ったとされていることから、描かれている奉納者は Fra Lorenzo Cardoni とその妻である。との説。

ただし、マサッチョが「聖三位一体」を描いた時期より前に死去しており、顔はマサッチョが想像して描いたことになってしまいます。

説 2. 祭壇の作成依頼をしたのはカルドーニだが、マサッチョが「聖三位一体」のフレスコ画を制作したのはそれより後故に、カルドーニの子孫のだれかである。とする説。

1.2. 説ともビリオッティの年代記はマサッチョの「聖三位一体」より 100 年以上後の物ですから信憑性に欠けます。

説 3. 墓石に「Domenico di Lenzo,et Suorum1426」とあり、現在

の暦では 1426 年は 1427 年に当たるので、マサッチョが作成した時と一致することから、1426 年 1 月 19 日に死去した Domenico Lenzi とその妻である。との説。　（「et Suorum」は、「とその家族」の意味。）
ただし、Domenico di Lenzo 自身の墓はオンニサンティ（Ognissanti）聖堂に存在しています。

なお、同じような赤いターバンを巻いた男性像に、ヤン・ファン・アイク（Jan Van Eyck）の「ターバンの男」があります。これは画家の自画像です。（1433 年）また同年代の作品にロベール・カンパン（Robert Campin）の「ターバンの男」（1430 年頃）の作品がありますが、こちらは誰を描いたのか不詳となっています。
このように赤いターバンを巻くことは当時のファッションだったのでしょうか。

２点とも London National Gallery 所蔵

３．最下段に描かれた骸骨

骸骨の上の壁面にはラテン語で、「過去の私は現在の貴方であり、現在の私は未来の貴方である」　という意味の銘が刻まれています。

生命ある者は必ず死ぬ、死を想え（Memento Mori）という戒めです。

キリストの磔刑の場面を描いた絵画では、十字架のもとに、散在する骸骨が描かれているものが見られます。ゴルゴタは「骸骨」を意味しますから、多くの骸骨が散在していても不思議ではありません。このようにゴルゴタの丘で見られる骸骨とは別に、キリストが磔刑されたゴルゴタの丘には人類の祖であるアダムが埋葬されていると信じられていました。

Gaddi　Santa Croce1400 年

「聖三位一体」の下に描かれている骸骨は、アダムであり、すなわち全人類を現わしているのです。

十字架降下後のキリストの遺体の下に骸骨が描かれた例。

Veronese　1573 年

コラム　4

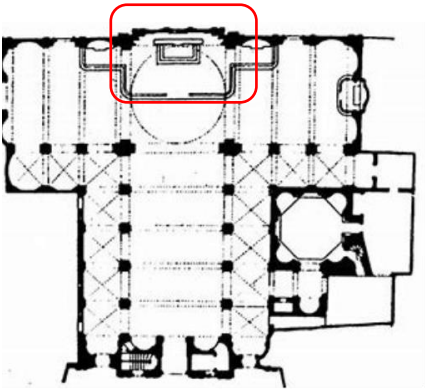
だまし絵

サンタマリア・プレッソ・サンサティロ聖堂
（Santa Maria presso San Satiro）　Milano

サンタマリア・プレッソ・サンサティロ聖堂はミラノの繁華街にあり、トリノ大通りに面しています。
876 年(一説に 879 年)、アンスペルト大司教が聖アンブロージョの弟の聖サティロに奉献してロンバルド・ロマネスク様式で建設しました。現在では、その遺構は鐘楼と、一部ピエタ礼拝堂に見られるだけです。
1472 年から 1482 年にガレアッツオ公（Galeazzo Maria Sforza）の命により、ブラマンテ(Donato Bramante)が中心になって改修したと考えられています。

ブラマンテの傑作とされています。正面から見た主祭壇です。その裏には奥行きのあるアプシスが見えています。

現在の聖堂内部は三廊式で蒲鉾型天井です。正面から見ると中央主祭壇の奥まで長く続いているように見えます。
しかしながら、ブラマンテが限られたスペースを生かして作成した、中央主祭壇からフレスコ画のアプシスまでは、実際には奥行き 1 メートルにも満たないものです。
このアプシスは、だまし絵(trompe l'oeil)の中でも一番古い作品の一つと見做されています。
聖堂の外に出てアプシスのある場所に回ってみると主祭壇の裏側は通りになっており、アプシスがほぼ平面であることが分かります。
なお、このアプシスは、アマデオ（Giovanni Antonio Amadeo）の設計を元に再建されたとの説もあります。



撮影　筆者

コラム　5

ペストと死の舞踏

ペストは人類の歴史と共に存在しており、ローマ帝国時代にも記録が残っています。1348 年のペストの前にも悪疫は周期的に発生していたのです。ただし、1348 年に発生した大悪疫ほど鮮烈な死をもたらしたことは有りませんでした。ただし、統計の無い時代について推計することは困難です。南部の方が早く流行をうけただけに被害は大きく、感染の機会の多い都市部の方が農村部より深刻だっただろうと思われます。

恐らく、全ヨーロッパについて人口の三分の一程度は生命を失ったと推定されます。数にして約 3000 万人になります。14 世紀後半のイングランドの人口が 400 万にも満たない数だったことを想うといかにすさまじかったかが理解できます。

この人口の大損害を取り戻すにはほぼ 300 年間かかっています。それほどに深い傷跡を残したのです。

しかもペストは 1348 年だけでおさまりませんでした。1350 年に一旦治まりますが、14 世紀だけで数回、15 世紀にもそれ以降にも威力は次第に減退していきましたが、繰り返し襲ってきました。死の記憶は民衆に取りついて離れなくなったのです。

ボッカチオの「デカメロン」はフィレンツェで大悪疫が流行した際に感染を避けて山荘に集った男女が退屈しのぎに語った話を 100 話集めた物語とされています。しかしながら、物語だけでなく、フィレンツェの街で起きた凄まじいまでの死の状況が戦慄を覚えるほど生々しく描写されてもいるのです。

ピサにある霊廟（Camposanto）に「死の勝利」　（Il Trionfo della Morte）と題されたブッファルマッコが 1336 年から 1342 年に制作した壁画があります。欧州を襲った 1348 年のペストの 10 年ほど前に描かれています。左端に三つの棺桶が置かれ、それぞれ骸骨、肉体が崩れ落ちた死者、埋葬されたばかりの死者が収められています。

そこを通り掛かった馬上の貴族がのぞき込んでいます。いかに羽振りが良かろうが、いずれ肉は腐り、骨と化す。死は確実に生に勝利している、と世の無常を悟るのです。

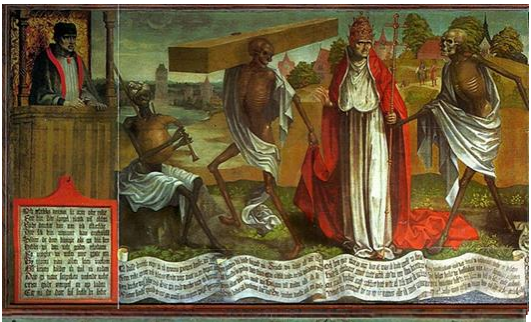
同じような三つの棺桶が並んだフレスコ画をクレモナ（Cremona）

の聖ルカ聖堂でも見ることができます。
ピサの「死の勝利」の 30 年後にパリのイノサン墓地に「死の舞踏」と呼ばれる線描画が描かれます（現物は破損）。皇帝と教皇を筆頭に十数人の生者がその死後の姿の骸骨とペアを組みダンスをしています。
15 世紀になると死者は腐敗した肉体を捨て、骸骨の形で表されるようになります。
死の舞踏は画題として広く取り上げられるようになっていきましたので、欧州各地で類似の作品を見ることができます。
絵画のみならず、「死こそが、全てのものの発想の起点に立つ。」と言う発想から、「往生術（Ars Moriendi）」の表題を持つ小冊子が印刷術の普及と共に、広まっていきます。

挿絵は、ミヒャエル・ヴォルグムート（Michael Wolgemut）
1493 年　版画

「往生術」は、いつも死のことを考え、備えをするものに、安穏の死と永遠の天国が与えられるのだ、と教えています。
「死を想え」という標語が流行します。四六時中死のことを頭に入れて生きるのが大切であり、死を常に考えて、死を念じ続ける者はペストの死を欣然として迎え、神の救済にあずかることができるのだ。という思想です。

エストニアのタリン（Tallinn）の聖ニコラス聖堂



死の舞踏の例です。

ベルント・ノトケ（Bernt Notke）1450年頃作

棺桶を担いだ骸骨の後に、教皇とその死者のペアが先頭に立ち、皇帝とその死者のペアが続く行列が延々と続いていきます。

６．ローマでの作品

１．サンタマリア・マッジョーレ
（Santa Maria Maggiore）聖堂

サンタマリア・マッジョーレ聖堂は、聖ピエトロ大聖堂、聖ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂、聖パオロ・フオリレ・ムーラ聖堂と並び、ローマを代表する四聖堂の一つです。
5 世紀半ばに建立された後、歴代の多くの教皇がこの聖堂の改築に関与してきました。その為、初期キリスト教時代の構造から、ロマネスク様式、ゴティック様式、ルネサンス様式、バロック様式と、その時代の建築様式が混在しています。
8 月の聖母被昇天の日に雪が降った場所に聖堂が立てられたことから雪の聖母聖堂（Santa Maria delle Nevi）と呼ばれていました。
アプシス一面を埋める「聖母戴冠」のモザイク画はヤコポ・トリッティ（Jacopo Torriti）作で、1295 年に完成しています。
キリストと同じ玉座に坐す聖母の王冠にキリストは手を添え、左右には多くの天使が取り囲んで見上げています。左側には聖ペテロと聖パウロ、聖フランチェスコが並び、右手には洗礼者聖ヨハネと福音書記者聖ヨハネ、聖アントニウスが並びます。
小さく膝づくのはニコラス(Nicolas)4 世教皇とコロンナ(Colonna)枢機卿です。
身廊の円柱の上の両壁にはローマでも最古の部類に属する、旧約聖書と新約聖書を題材とした多くのモザイク画が並んでいます。

ここサンタマリア・マッジョーレ聖堂でもマサッチョはマソリーノと組んで、聖歌隊席に掲げられた聖人を描いた衝立を作成しています。

聖ヒエロニムスと洗礼者聖ヨハネ
（San Girolamo e San Battista）　1428 年
London National Gallery

ローマのサンタマリア・マッジョーレ（Santa Maria Maggiore）聖堂の、コロンナ一族により発注されたと推定される聖歌隊席に掲げられていたものです。
マサッチョの描いた洗礼者聖ヨハネのパネルは聖歌隊席の内側の聖職者側を向き、マソリーノの描いた教皇グレゴリウスのパネルは参列者側に見えるようになっていたと思われます。
聖人が二人一組になって描かれた衝立は数多く作成されましたが、その多くが逸失、散逸してしまいました。
なお、ロンドンにあるこの作品は、マサッチョがローマで制作した最後の作品とする説もあります。聖ヒエロニムスは枢機卿の姿で描

かれ、手に聖書と聖堂を持っています。足元にはその象徴であるライオンが描かれています。

右はマッソリーノ作で、教皇グレゴリウスと聖使徒マティア（San Mattia）が描かれています。

２．聖クレメンテ聖堂　（San Clenente al Laterano）
カテリナ礼拝堂　（Cappela de Catelina）

4 世紀の初期に、キリスト教徒の自宅を四代目の教皇であった聖クレメンテに奉献した建物から始まるとされ、ローマでも一番古い聖堂の一つです。
正面の扉口にはイオニア式の円柱と門に付けられたコリント式の円柱で出来た柱廊式小玄関があり、そこを過ぎると 12 世紀の柱廊式中庭である聖堂前の回廊に出ます。この形態はローマでも数少ない例です。左側にある鐘楼は 17 世紀初頭に建設されたものです。三層に及ぶ建設物の複合体で、現在地上で見えているのは 12 世紀に建設されたロマネスク様式の聖堂です。その地下に 4 世紀からの建屋が在り、その建物は共和制ローマ時代の建屋の上に建っています。その地下には、ミトラス（Mithras）信仰を示す神の像が飾られた神殿を含む、広い空間が開けています。神殿前には生贄を奉じる祭壇が残っています。

聖堂内は三廊式で、床は色大理石で飾られています。天井と壁は 18 世紀に改修されていますが、中央祭壇前の聖歌隊席は身廊の中央まで張り出しており、6 世紀の聖堂を活用しています。ローマの聖堂の中でも初期の聖堂の遺構が良く維持されている聖堂の一つです。アプシスの上の円蓋は豪華なモザイク画で飾られています。
金地の中央にキリストの磔刑が描かれ、その十字架のなかには聖十二使徒を表象する鳩が描かれています。十字架の両脇には聖母と福音書記者聖ヨハネが立っています。
扉口から入ってすぐ左手にある聖カテリナ礼拝堂には「聖カテリナの生涯」、「キリストの磔刑」等、マサッチョとマソリーノが描いたフレスコ画が有りますが、この聖堂では新しい作品のように見えてしまいます。

凱旋門アーチに描かれた受胎告知はマソリーノの作と言われています。
中央のキリストの磔刑はマサッチョが描いたとされています。
このような集団で描かれたキリストの磔刑図は、ローマでは多くは有りません。

マサッチョはこの絵を描いている時に突然死しています。

参考
マソリーノ

マソリーノは正式名を Tommaso di Cristoforo Fini と言います。
マサッチョより 18 歳年上で、マサッチョより 20 年ほど長生きしています。
マサッチョより 1 年後の 1423 年にフィレンツェのギルドに登録されています。
国際ゴティック様式を学んだ画家で、マサッチョに出会う前は、一点透視画法を取り入れた絵画は描いていません。

右の「聖母子」は 1423 年作成です。（ウィフィツ美術館）
イタリア国内はもとより、ハンガリーを含め、パトロンを求めて、多くの土地に出かけています。
カステリョーネ枢機卿（Cardinal Branda Castiglione）の要請を受けて、ローマのサンクレメンテ聖堂で制作した縁をもとに、マサッチョの死後、枢機卿の地元のオローナ（Olona）の洗礼堂に「洗礼者聖ヨハネ伝」を描いています。

「ヘロデ王の饗宴」（1435 年）

一点透視画法を活用して建築構造を描いているように見えますが、画面の左右で消失点が異なっています。
山の中腹で洗礼者聖ヨハネの埋葬が行われていますが、どこか不自然です。遠近感に乏しく、人物表現等、根本的なところは国際ゴティック様式に基づく画法であり、マサッチョ亡き後、革新的な表現は消えています。
マソリーノはマサッチョと共同して作品を制作することはありましたが、常に自分の世界から出ることはできず、最終的にマサッチョの革新的な画法や人物表現を学ぶことはできなかったと思われます。

なお、ブランカッチ礼拝堂では、「誘惑」の他に、「聖ピエトロの説教」と「脚萎えの治療とタビタの蘇生」を描いています。

ブランカッチ礼拝堂では背景の山の描き方などにマサッチョの画法の影響も見られます。

街中を一点透視画法で描いてはいますが、人物に生命力が感じられません。光の方向も定まっていません。

７．おわりに

マサッチョはその短い人生にも関わらず、ゴティック様式からルネサンス様式への過渡期に、時代に先駆けして出現した画家として多くの美術書に作品が取り上げられています。
しかしながら、どうしてこのような異端児が突然出現したのか、残された数少ない史料やマサッチョを扱った評論書からは、判ることはありませんでした。ヴァザーリやその他の評論家も褒めそやしているばかりです。
勝手に創造力を働かせてみると、ニックネームにその解く鍵があるように思えてきました。
マサッチョと呼ばれたそのニックネームから、「ガサツで、身の回りを構わない、不細工な男」のイメージが湧き上がってきます。
ここから推測すると、従来の因習や決め事に頓着しない男が浮かび上がってきます。全くの自由人だったのでしょう。
そうでなければあの革新的な作品は生まれるはずもありません。
次にひと回り以上年上のマソリーノとの共同作品が多いことも重要な点だと思われます。
「聖アンナと聖母子（聖家族)」と「ブランカッチ礼拝堂」は両者が暮らしていた、フィレンツェでの共同作業とはいえ、マソリーノがフィレンツェでギルドに登録してから間もない時期に続けて作品が制作されています。
年長者のマソリーノにとって、マサッチョは、どうにも放っておく訳にはいかない、だらしないが、かわいげのある、腕の良い男だったのではないでしょうか。

マサッチョは、わざわざマソリーノの後を追って、ローマまで行き、サンタマリア・マッジョーレ聖堂と聖クレメンテ聖堂で共同して制作しています。これもマソリーノが呼び寄せたからです。
さらに、「聖三位一体」ではドナテッロから一点透視画法の指導や作画上のアドヴァイスを受けていたと思われることが挙げられます。
また、ピサでの「多翼祭壇画」を制作した際の金銭のやり取りを弟が管理していたことも挙げられます。
これらの点などを勘案してみると、マサッチョ本人はいわゆる世事に疎く、金銭感覚もなく、生活力に乏しくて、周囲に支えられて作品を描いていたのではないかと思われてくるのです。
人がほっておけないほど、人間的に魅力のある画家だったのではないでしょうか。

2022 年 白露の候

参考文献

・Anabel Yhomas, *The Painter's Practice in Renaissance Tuscany,* Cambridge, 1995.

・Andrew Ladis, *The Brancacci Chapel,*George Braziller,1993.

・ Carl Brandon Strehlke,*ITALIAN PAINTINGS 1250-1450,*The Pennsylvania State Univ.

・Charles Dempsey, *Masaccio's Trinity: Altarpiece or Tomb?* The Art Bulletin Vol. 54, No. 3 (Sep., 1972), pp. 279-281 , CAA.

「聖三位一体」の奉納者は Fra Lorenzo Cardoni としており、時代認証に問題があります。

・Elena Capretti, *The Great Masters of Italian Art*,Scala,2000.

・John T. Spike, *Masaccio,* Abbeville Press,1995.

・Luciano Berti, *MASACCIO,*The Pennsylvania State Univ. ,1967.

・Mina Gregori,*PAINTINGS IN THE UFFIZI & PITTI GALLERIES,*A Bulfinch Pres,1994.

・Patricia Egan,ed, *Sixteen Studies,*Janson,Horst Woldemar,1970.

・Paul Hills, *THE LIGHT OF EARLY PAINTING,* Yale Univ., 1987.

・Paul Joannides, *Masaccio and Masolino A Comlpete Catalogue,* Harry N.Abram,Inc.,1993.

・Raimond van Marle, *Italian Schools of Painting,*Hacker art bokks,1970.

・ Richard Fremantle, *Florentine Gothic Painters From Giotto to Masaccio A Guide to Painting in and near Florence 1300 to 1450,* Martin Secker & Warburg LTD,1975.

・Rita Maria Comanducci *,L'altare Nostro de la Trinità': Masaccio's Trinity and the Berti Family,* The Burlington Magazine Vol. 145,

No. 1198 (Jan., 2003), pp. 14-21 , Burlington Magazine Publications Ltd.

「聖三位一体」の奉納者は Fra Lorenzo Cardoni の子孫だ、としています。

・Rona Goffen,ed, *MASACCIO'S Trinity,*Cambridge,1998.

・Steffi RoettgenItalian Frescoes *THE EARKY RENAISSANCE 1400-1470,* Abbeville Press,

・Ursula Schlegel、*Observations on Masaccio's Trinity Fresco in Santa Maria Novella*、The Art Bulletin Vol. 45, No. 1 (Mar., 1963), pp. 19-33 , CAA.

「聖三位一体」の祭壇を建設したのは Fra Lorenzo Cardoni a Prior of the Dominican としています。

その他にルネサンスを扱った美術書、イタリアの美術に関する書物、西洋美術史、美術全集など、美術に関する書物を紐解けば必ずその名前を見つけることができるでしょう。